

頭部には両側から切り込みが入れられており、下部は欠損している。両面に墨書が認められる呪符木簡であるが、残存状況は良好ではなく、わずかに墨痕を確認できる程度である。材はヒノキである。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『川除・藤ノ木遺跡』（兵庫県文化財調査報告一〇四、一九九二年）

（山田清朝）

兵庫県・板井寺ヶ谷遺跡

- 1 所在地 兵庫県篠山市（旧多紀郡西紀町）上板井寺ヶ谷坪
- 2 調査期間 一九八三年（昭58）一〇月～一九八四年二二月
- 3 発掘機関 兵庫県教育委員会
- 4 調査担当者 水口富夫・市橋重喜・岸本一宏
- 5 遺跡の種類 集落跡・粘土探掘跡・自然流路
- 6 遺跡の年代 後期旧石器時代、弥生時代後期～古墳時代前期、平安時代末～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



（篠山）

板井寺ヶ谷遺跡は兵庫県東部の篠山盆地の北西隅付近に位置し、標高約三〇〇mの興法寺山から南東に張り出した微高地上に立地する集落跡と、その東側に入り込んだ谷状地からなる。

日本道路公団による舞鶴自動車道建設に伴い、一九八三・八四年度に約七〇〇〇㎡の発掘調査を行なった。

その結果、平安時代末から鎌倉時代初頭までを中心とした掘立柱建物群・井戸などを検出し、下層には弥生時代後期から古墳時代前期までの粘土採掘坑を数多く検出した。さらにその下層では、後期旧石器時代の大量の石器に加え、遺物集中箇所や礫群なども検出し、篠山盆地内の旧石器時代を代表する遺跡となった。

今回紹介する木簡は、掘立柱建物SB〇八内の北東隅に位置する井戸SE〇一から出土した三点と、東地区と呼称した谷状湿地部分の埋積土及び旧河道底から出土した二点である。いずれも一九八四年度の調査時に出土した。

井戸SE〇一は縦板組横棧式の井戸で、深さは約1m遺存していた。木簡は扇骨・棒状斎串・筆軸・瓦器椀などともに井戸底付近から出土した。木簡の年代は、共伴土器から鎌倉時代前半と考えられる。

東地区の谷状湿地部分のうち、中央部は旧河道と呼称した。木簡(4)は旧河道底の砂礫層上面から人形・陽物形といった祭祀具とともに出土し、鎌倉時代前半のものと考えられる。(5)は包含層から出土した。木簡が出土した包含層からは田舟や木錘が出土し、その上層では鎌倉時代後半の瓦器のほか、連菌下駄や馬鋏・卒塔婆転用大足・挽物などが出土している。これらの層は湿地堆積層であり、泥状であったために軽いものは浮き、重いものは沈むといった現象が起こっていたと推定でき、層ごとの堆積時期の限定は難しい。但し、旧

河道が機能していたのは平安時代末から鎌倉時代前半までの建物群が存続していた時期であり、その後、泥が堆積し湿地状を呈していたと考えられる。

8 木簡の釈文・内容

井戸SE〇一

(1) 「>咄天疋 (符籙) □□□□□」
[急々如律令カ] 274×38×6 032

(2) 「>咄天疋 (符籙) □急々如律令」
[鬼カ] 236×40×5 032

(3) 「×□□□」
[如律令カ] (124)×(27)×3 059

東地区旧河道

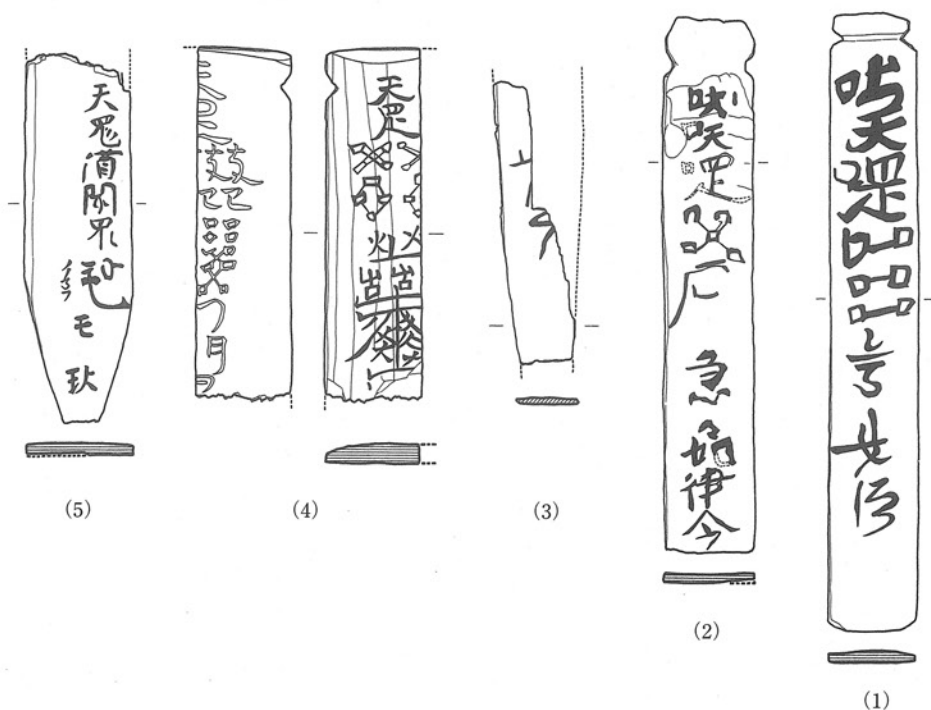
(4) 「>天疋 (符籙) ・」
(156)×(41)×9 039

・「>天疋 (符籙)

東地区包含層

(5) 天鬼□□□□□□」
(169)×47×6 059

(1)はスギ、(2)はサワラであり、ともに完形の呪符木簡で、同一文



言であるが、符籙が異なる。(3)はスギ材で、上下を大きく欠損するが、下端が尖る形態であろう。井戸水に関する祭祀が行なわれたことを示す遺物である。

(4)はスギ材で、側面及び下部を欠損するが、推定幅6cmで断面が薄針状を呈する。凸面には墨が残り、符籙には「火」の文字がみえるが、反対面では墨は消えて文字部分が浮き上がっている。

(5)は上部と下端を欠失する。文字は不鮮明で片面にのみ記されている。漢字が記され符籙ではないが、呪符の下端の可能性がある。

9 関係文献

兵庫県教育委員会『板井寺ヶ谷遺跡―縄文時代―中世の調査―』
(兵庫県文化財調査報告九六―二、一九九二年)

(岸本一宏)